

「しまね循環型社会」  
の形成に向けた数値目標の  
進捗状況調査報告書

【平成28年度実績】

平成30年3月



# 1. 発生抑制目標に対する進捗状況

## ■ 目 標

「第3期しまね循環型社会推進計画」では、県民・事業者・行政（市町村・島根県）の積極的な取組により、今後、島根県内から排出される一般廃棄物及び産業廃棄物の排出量の目標を次のとおりとしています。なお、家畜ふん尿を主とする農業系廃棄物は、発生抑制自体になじまないため目標設定は行わないものとしています。

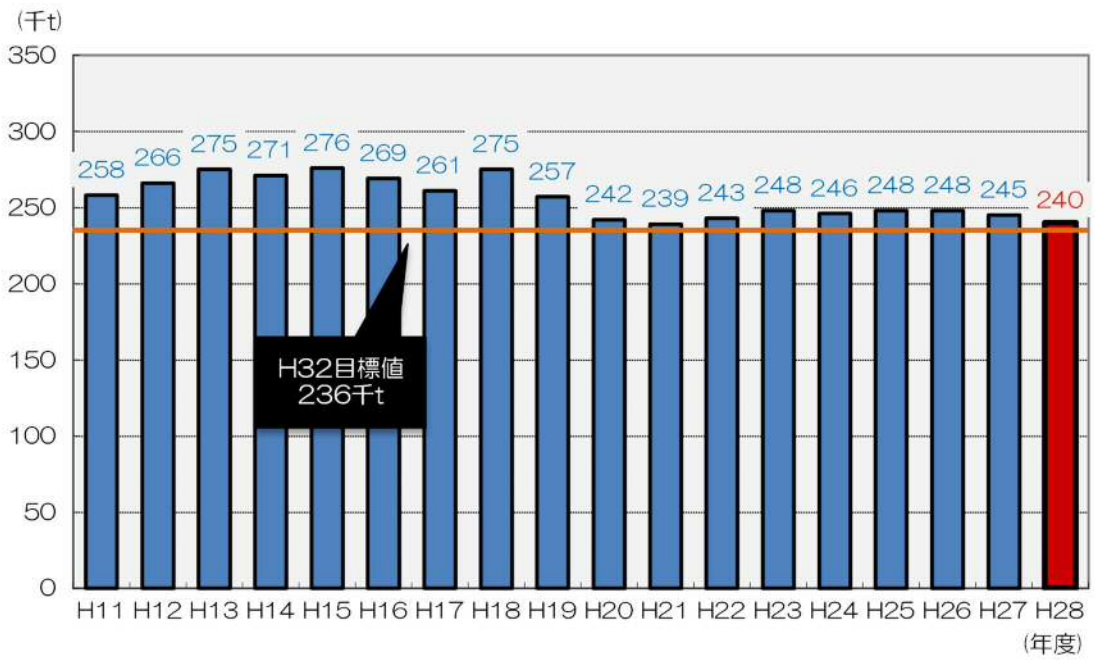
- ①一般廃棄物：基準年(H25)に対し、平成32年度の排出量を5%以上削減する。
- ②産業廃棄物：基準年(H25)に対し、平成32年度の排出量の増加を1%以下に抑制する。  
※産業廃棄物は農業を除く。

## ■ 排出量

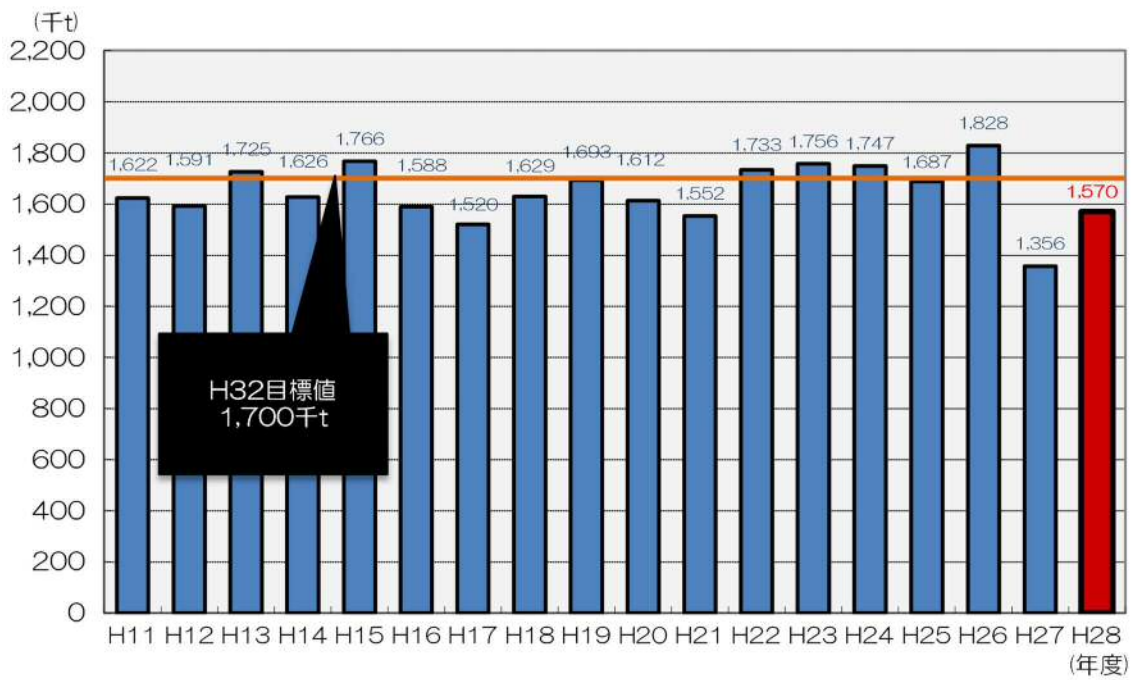
	実		績	
	一般廃棄物		産業廃棄物(農業を除く)	
H11	258千 t	—	1,622千 t	—
H12	266千 t	—	1,591千 t	—
H13	275千 t	—	1,725千 t	—
H14	271千 t	—	1,626千 t	—
H15	276千 t	—	1,766千 t	—
H16	269千 t	—	1,588千 t	—
H17	261千 t	—	1,520千 t	—
H18	275千 t	—	1,629千 t	—
H19	257千 t	—	1,693千 t	—
H20	242千 t	—	1,612千 t	—
H21	239千 t	—	1,552千 t	—
H22	243千 t	—	1,733千 t	—
H23	248千 t	—	1,756千 t	—
H24	246千 t	—	1,747千 t	—
H25	248千 t	【100】	1,687千 t	【100】
H26	248千 t	【100】	1,828千 t	【108.4】
H27	245千 t	【98.8】	1,356千 t	【80.1】
H28	240千 t	【96.8】	1,570千 t	【93.1】
目標 H32	236千 t	【95】	1,700千 t	【101】

(注) 一般廃棄物については実績値（収集ごみ、直搬ごみ、自家処理量、集団回収量及び災害廃棄物（「一般廃棄物処理の現況」においてH25から別区分）の合計値）  
 産業廃棄物については、多量排出事業者の実績に基づく推計値（H11、H16、H20及びH25は島根県産業廃棄物実態調査に基づく推計値）  
 【 】内の数値は基準年（H25）を100とした場合の比率

一般廃棄物



産業廃棄物 (農業を除く)



## ■現状と課題

### 【一般廃棄物】

	解 説
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般廃棄物の排出量は、平成15年度の276千tをピークに減少に転じ、平成21年度には、239千tまで減少しました。その後若干増加したのちほぼ横ばい傾向で推移していましたが、平成28年度は240千tまで減少しています。</li> <li>平成18年度に一時的に排出量が大きく増加していますが、同年、発生した大規模な水害により災害ごみが排出されたことが原因と推察されます。</li> </ul>
評 価	<ul style="list-style-type: none"> <li>第3期しまね循環型社会推進計画では、一般廃棄物の排出量の目標設定について236千tを目標値としています。</li> <li>平成28年度の一般廃棄物の排出量は、目標値を4千t程度上回っており、さらに削減が必要です。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>島根県では、生活系一般廃棄物が約70%、事業系一般廃棄物が約30%の排出割合となっています。人口規模が大きい松江市や浜田市、出雲市、益田市の都市部では、一般廃棄物の排出量が多いうえに事業系の一般廃棄物の割合が大きいことから、ごみ量の排出抑制のためには事業系一般廃棄物の削減を推進していく必要があります。</li> <li>島しょ部である海士町、西ノ島町、隠岐の島町では、人口規模が小さいため一般廃棄物の排出量は少ないですが、1人1日当たりの排出量に換算すると他の市町を上回る状況にあります。離島地域といった特殊性はあるものの、ごみをできるだけ出さないための取組実施が課題としてあげられます。</li> <li>一般廃棄物の大部分は可燃ごみで占められており、これを減らすことがごみ排出量の削減に効果的です。可燃ごみには生ごみが多く含まれているため、食品ロスを削減する施策や生ごみの堆肥化など県民やNPO法人等、事業者と連携し、進めていくことが必要です。</li> <li>生活系一般廃棄物の削減のために家庭にごみとなるものを持ち込まない、ものを大切に、できるだけ長く使う取組など、ごみ排出の抑制行動を啓発することが必要です。また、啓発には、若い世代や中高年齢層に対してそれぞれの生活スタイルに合わせて情報提供することが大切です。</li> </ul>

【産業廃棄物】

	解 説
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 産業廃棄物の排出量は、一般的に景気の動向などに大きく左右される傾向があり変動を繰り返しながら推移しています。平成27年度は大きく減少したため、平成28年度は前年度に比べ1,570千tと増加しました。</li> <li>• 島根県内の特徴として、排出量全体の約70%以上をがれき類、ばいじん、汚泥が占めており、排出量の増減は、土木工事や石炭火力発電所からの排出量に大きく影響される傾向にあります。</li> <li>• 平成28年度は、汚泥が減少したものの、火力発電所の稼働日数の増加により、ばいじん、燃えがらが増加、また建設業からの木くずが増加したことにより産業廃棄物の排出量が増加しています。</li> </ul>
評 価	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 第3期しまね循環型社会推進計画において産業廃棄物の排出量は1,700千tを目標値としています。</li> <li>• 平成28年度の産業廃棄物の排出量は、目標値を130千t下回っております。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 島根県の実績において、産業廃棄物の全体排出量に影響する廃棄物は、がれき類、ばいじん、汚泥の3種類で、これらの動向が排出量の増減に大きく影響しています。このうち、ばいじんは火力発電所、汚泥は流域下水道からの排出量が突出しており、景気動向の影響が少なく、比較的安定して排出されています。</li> <li>• ばいじんについては火力発電所の稼働状況によって、排出量が大きく左右されるため、石炭の燃焼後に発生するばいじんを低減させる原料の調達等で削減できることが考えられます。</li> <li>• がれき類については、土木・建設事業の動向に大きく影響を受けるため、廃棄物の分別や再利用を図っていく必要があります。</li> <li>• 県内での経済活動を活発に行いながら産業廃棄物の排出量が増加しないよう、事業者の排出削減に関する取組を更に推進し、可能な限り排出量の削減を図っていくことが課題としてあげられます。</li> </ul>

## 2. 最終処分目標に対する進捗状況

### ■目 標

県民・事業者・行政（市町村・島根県）の積極的な取組により、今後、島根県から排出される一般廃棄物及び産業廃棄物の最終処分量の目標を次のとおりとしています。なお、家畜ふん尿を主とする農業系廃棄物については、現状において最終処分の実態がないことから、目標設定は行わないものとしています。

①一般廃棄物：基準年(H25)に対し、平成32年度の最終処分量を12%以上削減する。

②産業廃棄物：基準年(H25)に対し、平成32年度の最終処分量を4%以上削減する。

※産業廃棄物は農業を除く。

### ■最終処分量

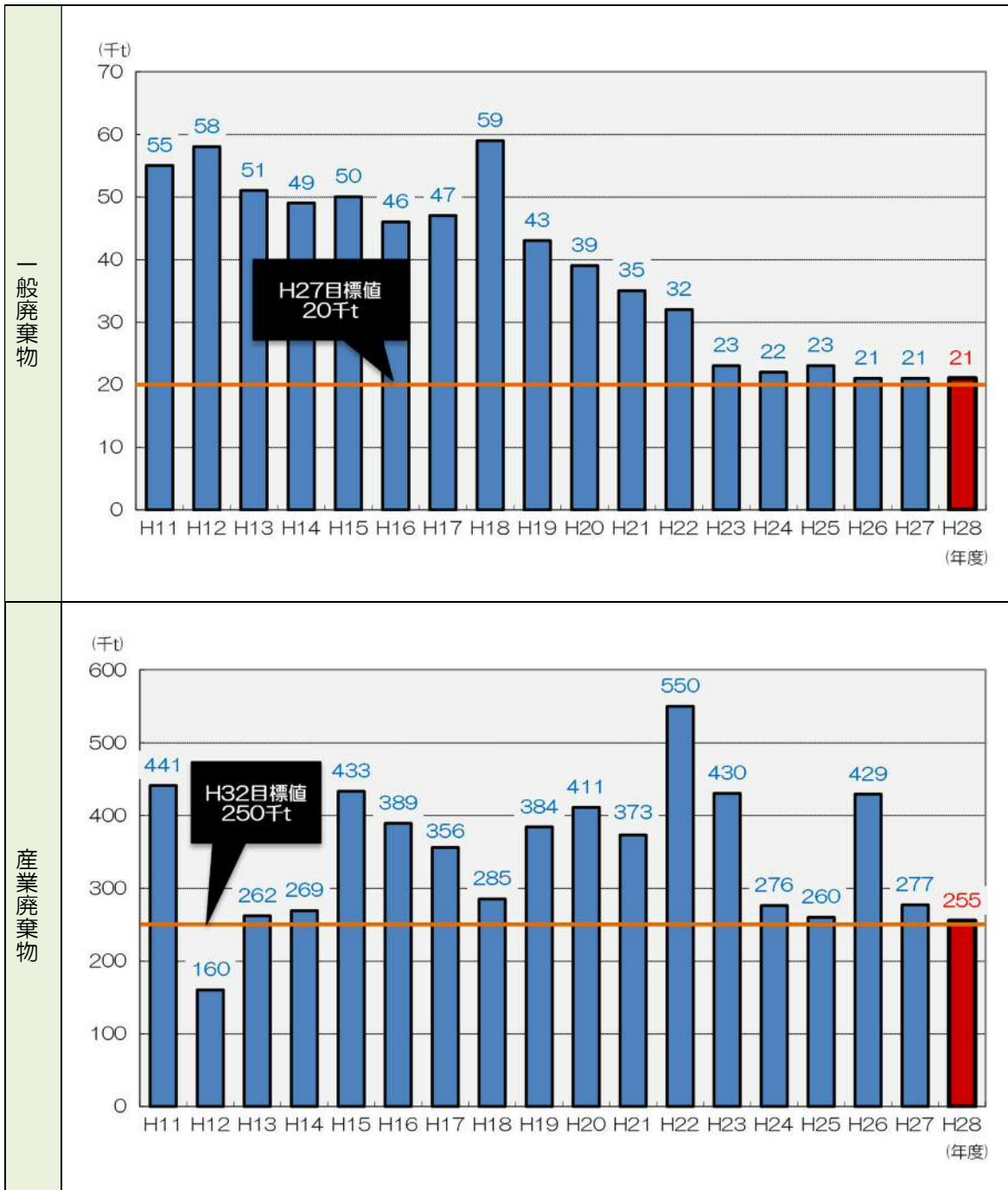
	実		績	
	一般廃棄物		産業廃棄物	
H11	55千 t	—	441千 t	—
H12	58千 t	—	160千 t	—
H13	51千 t	—	262千 t	—
H14	49千 t	—	269千 t	—
H15	50千 t	—	433千 t	—
H16	46千 t	—	389千 t	—
H17	47千 t	—	356千 t	—
H18	59千 t	—	285千 t	—
H19	43千 t	—	384千 t	—
H20	39千 t	—	411千 t	—
H21	35千 t	—	373千 t	—
H22	32千 t	—	550千 t	—
H23	23千 t	—	430千 t	—
H24	22千 t	—	276千 t	—
H25	23千 t	【100】	260千 t	【100】
H26	21千 t	【91.3】	429千 t	【165】
H27	21千 t	【91.3】	277千 t	【106.5】
H28	21千 t	【91.3】	255千 t	【98.1】
目標 H32	20千 t	【88】	250千 t	【96】

（注）一般廃棄物については実績値

産業廃棄物については県外からの搬入を含む。H11からH16は処分容量の実績に基づく推計値、H17からH28は実績値。

県内で発生した産業廃棄物のうち最終処分量の推計値は、H20が304千 t、H25が283千 t〔島根県産業廃棄物実態調査〕

【 】内の数値は基準年（H25）を100とした場合の比率





■現状と課題

【一般廃棄物】

	解 説
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般廃棄物の最終処分量は、調査開始当初から概ね減少傾向にあり、平成23年度からは21～23千tで横ばい推移が続いています。平成28年度最終処分量は21千tとなっています。</li> <li>平成18年度に一時的に最終処分量が大きく増加していますが、これは大規模な水害によって発生した災害ごみの埋立によるものと推察されます。</li> <li>平成23年度から最終処分量が大きく減少している主な要因は、松江市の一般廃棄物焼却溶融施設が新たに稼働開始し、焼却残渣の有効利用により最終処分量が大きく削減したためです。</li> <li>これまでの最終処分量の減少の要因には、ごみの再生利用の促進により直接埋立や不燃ごみ等の破碎圧縮残渣の埋立が減少したことがあげられます。</li> </ul>
評 価	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般廃棄物の最終処分量は、20千tを目標としています。</li> <li>平成28年度最終処分量は、目標値を1千t上回っており、さらに削減が必要です。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年度の一般廃棄物の排出量は、平成27年度より減少しているものの、最終処分量は横ばいのままのため、最終処分量の削減が必要です。</li> <li>中間処理を行わず直接埋立てられている量は、平成27年度より増加しており、排出時の分別回収の徹底や中間処理による減量・再資源化の促進を行い、直接埋立を減らすことが必要です。</li> <li>可燃ごみの焼却残渣及び不燃ごみ等の破碎圧縮残渣など中間処理後に最終処分されるものを削減するためには、焼却残渣の土木資材等への有効利用や不燃ごみの選別等の資源化を進めることが課題です。また、今後の施設更新時期に合わせて、処理方式の検討や有効ルートの実現を行うことが必要と考えられます。</li> <li>その他、ごみ排出量自体の削減や分別徹底を図るとともに、実践があまり進んでいないリユースに関する取組、ものを大切に、できるだけ長く使う取組などの情報提供と啓発といったソフト面からの働きかけが必要です。</li> </ul>

【産業廃棄物】

	解 説
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 最終処分量は、セメント資材などの需要増によるばいじんの再資源化が進んだことなどにより、平成22年度をピークに減少傾向にあります。</li> <li>• 平成26年度には石炭火力発電所が高水準で稼働し、ばいじん等の埋立が増加しましたが、平成27年度以降は有効利用量が埋立処分量より増加し、平成28年度は255千tまでに減少しています。</li> </ul> <p style="margin-left: 20px;">（※ 島根県においては、火力発電所から発生するばいじんの最終処分量の割合が大きいため、最終処分量の推移は、排出量と同様に、火力発電所に起因する最終処分量の増減に大きく影響される傾向があります。）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 平成22、26年度の大きな増加については、公共工事減少に伴う再生利用品の需要の減少がひとつの要因と考えられます。</li> </ul>
評 価	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 産業廃棄物の最終処分量は、250千 t を目標としています。</li> <li>• 平成28年度最終処分量は、目標値を5千 t 上回っており、さらに削減が必要です。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 火力発電所から発生するばいじんや燃え殻は、セメント原料や土木資材等への再生利用が行われており、土木工事や環境修復事業などに有効利用されています。県内の公共事業で、優先して再生利用品を利用し、さまざまな分野で有効利用する等景気に左右されにくい需要の開拓に取り組むことが課題としてあげられます。</li> <li>• ばいじん以外で最終処分量に比較的大きなウエイトを占めているがれき類、汚泥、鉱さいなどについても、排出量を削減することはもとより、ばいじんと同様にリサイクル製品の開発や景気の動向に左右されにくい需要の開拓に取り組んでいくことが課題としてあげられます。</li> </ul>

### 3. 再生利用目標に対する進捗状況

#### ■目 標

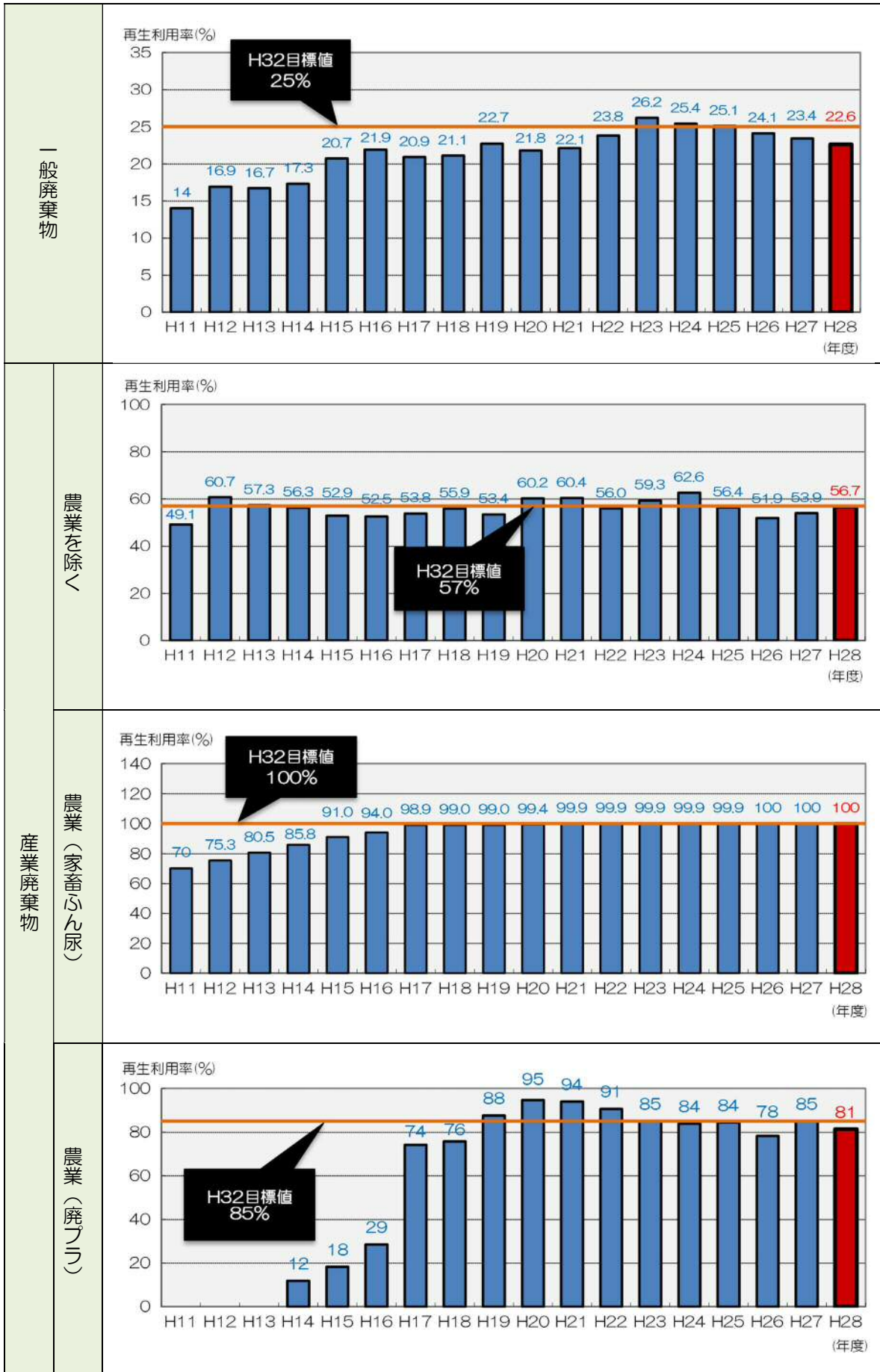
県民・事業者・行政（市町村・島根県）の積極的な取組により、今後、島根県から排出される一般廃棄物及び産業廃棄物の再生利用率の目標を次のとおりとしています。なお、農業（家畜ふん尿）に関しては、平成11年に制定された「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」に基づく適切な再生利用率の目標を設定しています。

- |                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| ①一般廃棄物            | ：H32の再生利用率を、25%以上とする。 |
| ②産業廃棄物（農業を除く）     | ：H32の再生利用率を、57%以上とする。 |
| ③産業廃棄物（農業（家畜ふん尿）） | ：H32の再生利用率を、100%とする。  |
| ④産業廃棄物（農業（廃プラ））   | ：H32の再生利用率を、85%以上とする。 |

#### ■再生利用率

	実 績			
	一般廃棄物	産業廃棄物		
		農業を除く	農 業 (家畜ふん尿)	農 業 (廃プラ)
H11	14%【38千t】	49%【797千t】	70%【367千t】	—
H12	16.9%【45千t】	60.7%【966千t】	75.3%【499千t】	—
H13	16.7%【46千t】	57.3%【988千t】	80.5%【545千t】	—
H14	17.3%【47千t】	56.3%【916千t】	85.8%【570千t】	12%【0.07千t】
H15	20.7%【57千t】	52.9%【934千t】	91.0%【617千t】	18%【0.12千t】
H16	21.9%【59千t】	52.5%【833千t】	94.0%【626千t】	29%【0.21千t】
H17	20.9%【55千t】	53.8%【817千t】	98.9%【653千t】	74%【0.50千t】
H18	21.1%【58千t】	55.9%【911千t】	99.0%【667千t】	76%【0.50千t】
H19	22.7%【58千t】	53.4%【904千t】	99.0%【665千t】	88%【0.57千t】
H20	21.8%【53千t】	60.2%【969千t】	99.4%【552千t】	95%【0.55千t】
H21	22.1%【53千t】	60.4%【937千t】	99.9%【657千t】	94%【0.57千t】
H22	23.8%【58千t】	56.0%【971千t】	99.9%【646千t】	91%【0.47千t】
H23	26.2%【65千t】	59.3%【1,041千t】	99.9%【632千t】	85%【0.47千t】
H24	25.4%【62千t】	62.6%【1,093千t】	99.9%【633千t】	84%【0.51千t】
H25	25.1%【62千t】	56.4%【951千t】	99.9%【699千t】	84%【0.48千t】
H26	24.1%【60千t】	51.9%【948千t】	100.0%【665千t】	78%【0.38千t】
H27	23.4%【57千t】	53.9%【731千t】	100.0%【706千t】	85%【0.48千t】
H28	22.6%【54千t】	56.7%【890千t】	100.0%【510千t】	81%【0.49千t】
目標H32	25%【59千t】	57%【969千t】	100%【674千t】	85%【0.49千t】

(注) 一般廃棄物については実績値  
 産業廃棄物については推計値（H20に見直し、再計算したもの）、H20及びH25は島根県産業廃棄物実態調査に基づく推計値



■現状と課題

【一般廃棄物】

	解 説
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般廃棄物の再生利用率は、平成11年度以降、概ね上昇してきましたが、平成23年度を境に減少傾向となっています。平成28年度の再生利用率は22.6%となっています。</li> <li>平成23年度には松江市の一般廃棄物焼却溶融施設が稼働開始し、処理残渣である溶融スラグ（一般廃棄物焼却溶融施設の残渣）の有効利用が開始されています。</li> </ul>
評 価	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般廃棄物の再生利用率は25%を目標としています。</li> <li>平成25年度以降減少傾向が続き、平成28年度は目標値を下回っており、再生利用率の向上が必要です。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>焼却残渣の有効利用は、再生利用率の向上と最終処分量の削減に有効であるため、有効利用を行っていない市町村では、施設更新時期に合わせて処理方式の検討を行うことが必要と考えられます。</li> <li>※平成28年度現在の県内の一般廃棄物焼却溶融施設及び溶融設備がある焼却施設は、エコクリーン松江（松江市）、出雲エネルギーセンター（出雲市）、エコクリーンセンター（浜田地区広域行政組合（浜田市、江津市））及び益田地区広域クリーンセンター（益田地区広域市町村圏事務組合（益田市、津和野町、吉賀町））の4施設です。</li> <li>資源ごみについては、半数以上の市町村において排出量が減少しており、現状の分別収集では、資源ごみの排出量が大きく増加することは難しいと考えられます。そのため、一般廃棄物の排出量を削減し、取組の少ない生ごみや草木等の有効利用等を行うことが、再生利用率向上につながると考えられます。</li> <li>焼却残渣である溶融スラグは土木資材（骨材、路盤材等）などの有効利用が限られていることから、今後も安定的に利活用を進めるためには、需要開拓のためにさまざまな分野で有効活用する調査が必要です。一方で、溶融スラグの発生量は一般廃棄物焼却溶融施設での処理量に依存し、対応可能な需要量には限りがあることから、一定の需要開拓を行った後は、安定したスラグ有効利用体制を構築していくことが課題としてあげられます。</li> <li>隠岐圏域の島しょ部町村では、リサイクル業者等へ処理委託するためには島外へごみを輸送する必要があります。しかし、費用が嵩むことなどからごみの再生利用が進まない状況にあり、海士町、西ノ島町、隠岐の島町では再生利用率が低い傾向にあります。そのため、リサイクルシステムの確立や島外への輸送方法の効率化などを検討するとともに、住民や事業者の協力により積極的に再生利用の促進を図ることが課題としてあげられます。</li> <li>その他、県民の分別徹底の意識づけや、小型家電のリサイクルを推進するなど、新たな資源化物の分別と資源化ルートの確立を図っていくことが必要です。</li> </ul>

【産業廃棄物】

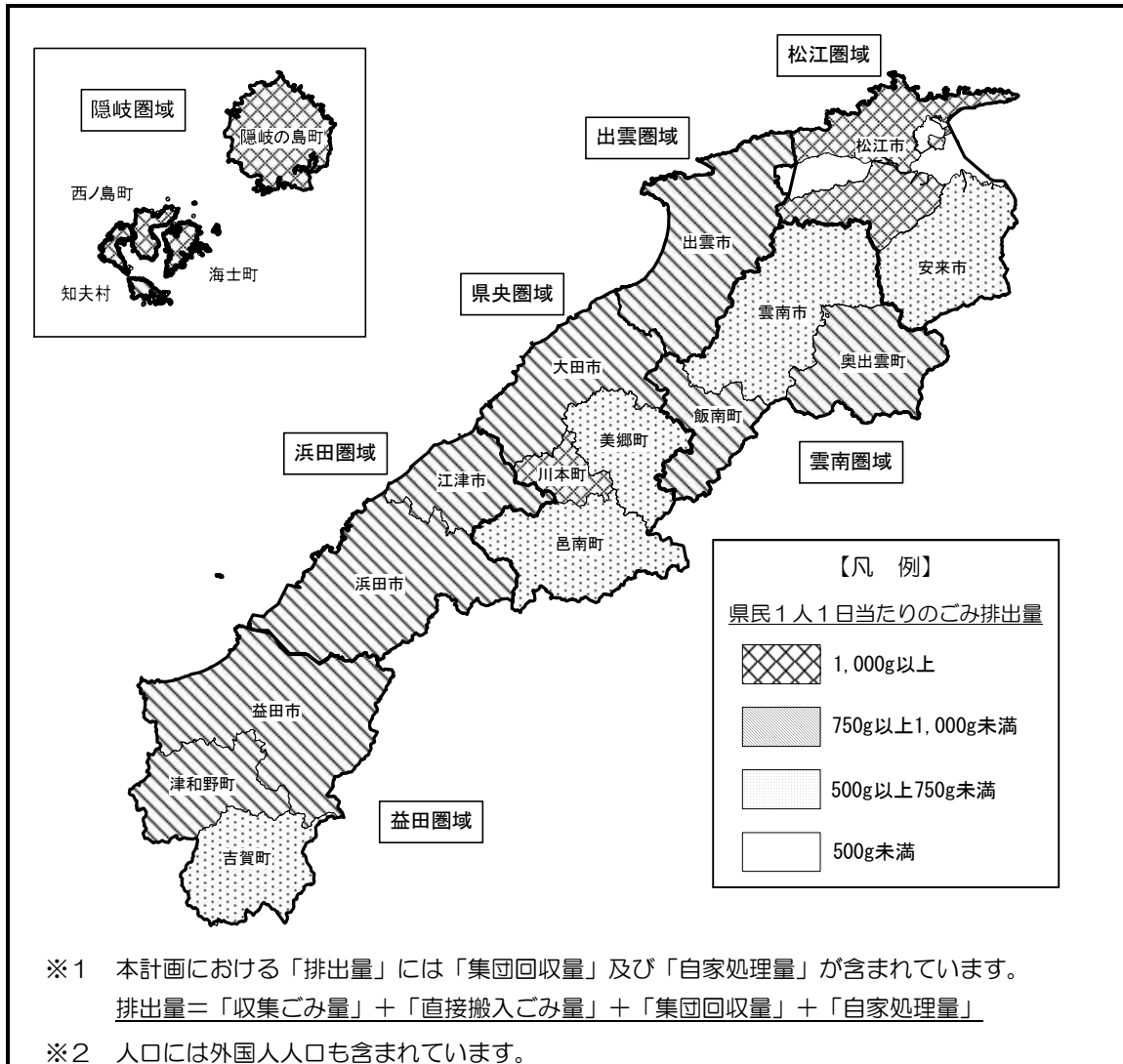
	解 説
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 農業を除く産業廃棄物の再生利用率は、概ね50%から60%の間を推移しており、平成28年度において56.7%となっています。</li> <li>• 農業由来の産業廃棄物のうち家畜ふん尿の再生利用率については、平成28年度は100%となっています。</li> <li>• 農業由来の廃プラスチック類の再生利用率については、平成17年度以降は70%以上となり、平成20年度の95%をピークに減少し、平成28年度においては81%となっています。</li> </ul>
評 価	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 農業を除く産業廃棄物の再生利用率の目標値は57%としていますが、平成28年度は目標を概ね達成しており、さらなる再生利用率の向上と維持が必要です。</li> <li>• 農業の家畜ふん尿の再生利用率の目標値は、100%を目標としており、目標を達成しています。</li> <li>• 農業の廃プラの再生利用率の目標値は85%としていますが、平成28年度は目標値を下回っており、再生利用率の向上が必要です。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 農業を除く産業廃棄物については、再生利用等の技術開発及び施設設備への支援を行い、さらにリサイクル製品の公共調達及び民需での利活用が進むよう販路を開拓するなど、事業者における再生利用を促進していくことが課題としてあげられます。</li> <li>• また、事業者に対して、リサイクルしやすい素材開発や利用の促進を行い、廃棄物を再利用しやすいシステム作りを推進していくため情報提供や制度等が必要です。</li> <li>• 農業由来の家畜ふん尿について目標値100%は達成しており、この再生利用率を維持していくことが必要です。</li> <li>• 農業由来の廃プラスチック類については、再生利用率は80%程度で推移していますが地域によって処理状況に差があるため、リサイクルを推進していく必要があります。</li> </ul>



## 4. 市町村別の一般廃棄物排出量及び再生利用率の状況

一般廃棄物について、市町村別の県民1人1日当たりのごみ排出量及び市町村別の再生利用率を取りまとめました。

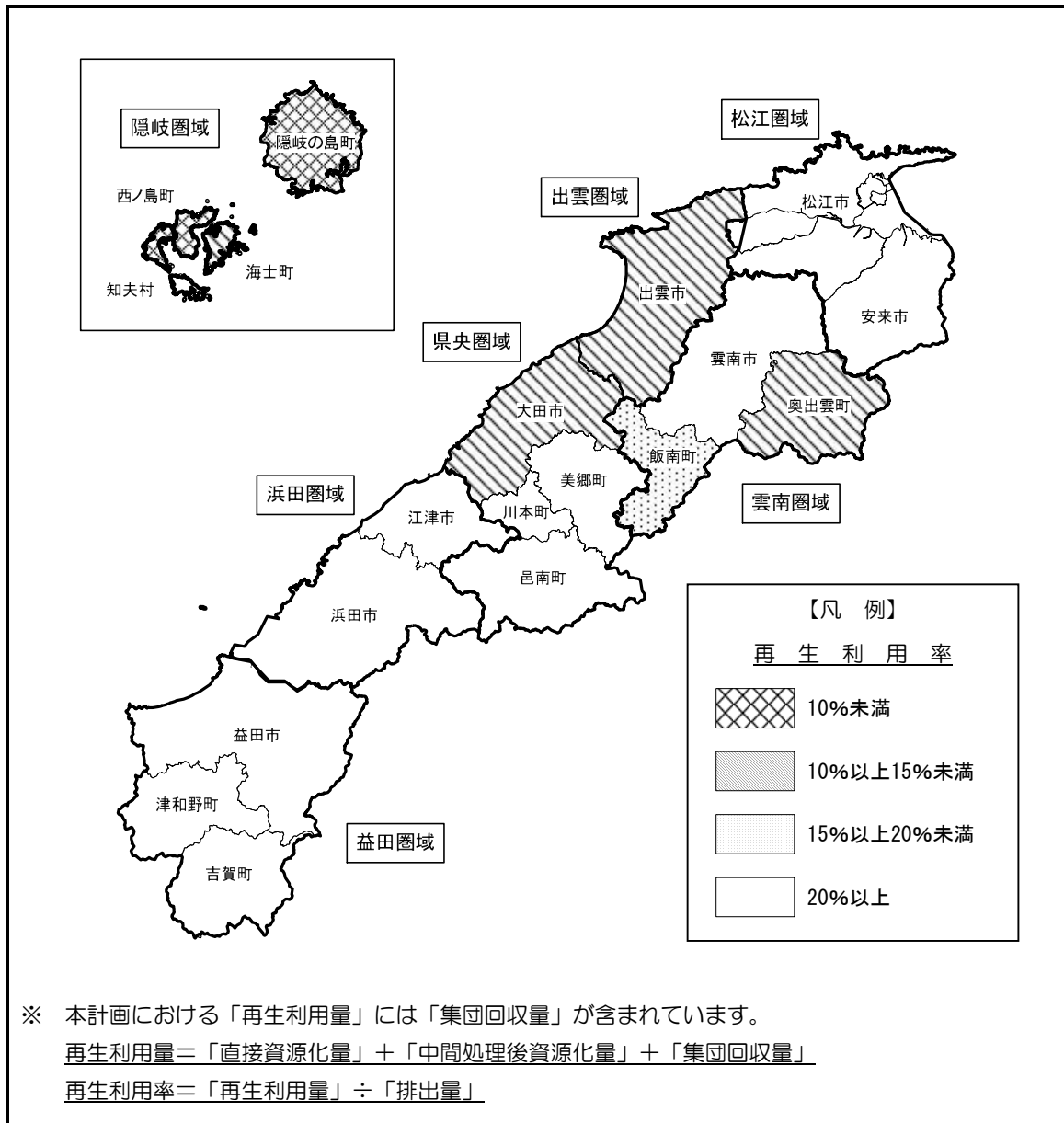
### ■市町村別の県民1人1日当たりのごみ排出量（平成28年度）



市町村別の県民1人1日当たりのごみ排出量 (単位：g/人日)

市町村名	排出量	市町村名	排出量	市町村名	排出量	市町村名	排出量
松江市	1,045	安来市	744	川本町	1,055	海士町	1,579
浜田市	964	江津市	873	美郷町	711	西ノ島町	1,405
出雲市	958	雲南市	696	邑南町	654	知夫村	781
益田市	963	奥出雲町	822	津和野町	852	隠岐の島町	1,407
大田市	783	飯南町	782	吉賀町	691	県全体	945

■市町村別の再生利用率（平成28年度）



市町村別の再生利用率

市町村名	再生利用率	市町村名	再生利用率	市町村名	再生利用率	市町村名	再生利用率
松江市	28.4%	安来市	24.4%	川本町	30.4%	海士町	11.7%
浜田市	23.5%	江津市	22.0%	美郷町	34.1%	西ノ島町	1.1%
出雲市	13.3%	雲南市	52.7%	邑南町	38.7%	知夫村	26.9%
益田市	21.0%	奥出雲町	10.2%	津和野町	29.4%	隠岐の島町	6.6%
大田市	14.2%	飯南町	17.7%	吉賀町	37.7%	県全体	22.6%



■現状と課題

【市町村別の県民1人1日当たりのごみ排出量】

	解 説
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>県民1人1日当たりのごみ排出量は、平成26年度まで増加傾向にありましたが、平成27年度より減少に転じています。平成28年度は県全体で945gと、平成27年度から8g減少しています。</li> <li>一方、環境省の一般廃棄物処理実態調査の結果と比較すると、平成24年度までは全国平均を下回っていましたが、現在は全国平均の最新値939g（平成27年度実績）より6g上回っています。</li> <li>市町村ごとの1人1日当たりのごみ排出量は、松江市、川本町と島しょ部（海士町、西ノ島町、隠岐の島町）で1,000gを上回っており、他市町村より高い傾向にあります。</li> <li>松江市等の都市部では、町村に比べ一般廃棄物の排出量に占める事業所からの排出割合が高いため、1人1日当たりのごみ排出量を高くする要因の一つになっていると推測されます。</li> <li>川本町では、一般廃棄物の排出量に占める直接搬入ごみの割合が高く、特に平成28年度は火災ごみなど一時的なごみが多かったことが影響していると考えられます。</li> <li>島しょ部の隠岐圏域では、家庭系ごみの直接搬入ごみの排出割合が高く、離島地域特有の地域性等が影響していると考えられます。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>県全体では県民1人1日当たりのごみ排出量は、平成26年度をピークに減少していますが、全国平均を上回っている状況です。都市部と島しょ部では1,000g以上を排出する市町村があり、排出量の削減を進めていく必要があります。</li> <li>都市部においては、家庭から排出される一般廃棄物の削減を進めるとともに、事業所から排出される一般廃棄物（食物残渣、紙くず等）の排出削減を推進していく必要があります。</li> <li>隠岐圏域の島しょ部の町においては、離島地域としての特殊性はあるものの、住民・NPO法人等・事業者、行政が一体となって排出量の削減に取り組む必要があります。特に、家庭系の直接搬入ごみの割合が高いことから、ごみ搬入時における分別徹底や資源化について指導していく必要があります。</li> <li>直接搬入ごみには、火災ごみや空き家対策等一時的に多量に排出されるごみが多く、雑多な状態で排出されることも多いため、ごみ処理施設への搬入時において、分別徹底や各市町村の制度にしたがって適正に処理する必要があります。</li> <li>可燃ごみの占める割合が高い市町村は、1人1日当たりのごみ排出量が高くなる傾向があり、可燃ごみを減らすため生ごみの削減や資源ごみが混入しないように分別徹底を啓発する必要があります。</li> <li>また、家庭にごみとなるものを持ち込まない等、ごみの排出抑制行動が必要です。</li> </ul>

【市町村別の再生利用率】

	解 説
現 状	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 市町村別の一般廃棄物の再生利用率については、市町村合併以前の平成11年度から可燃ごみのRDF化（ごみ固形燃料化）を図っていた雲南市（52.7%）をはじめ、川本町、美郷町、邑南町、吉賀町など県内には再生利用率が30%を超える市町村が多く存在します。また、一般廃棄物の排出量が多い松江市の再生利用率が大きく上がったことにより、島根県全体の再生利用率も上昇し、平成28年度は、22.6%と全国の平均値20.4%（平成27年度）を上回っています。</li> <li>• 隠岐圏域の島しょ部の町では、他の圏域に比べ再生利用率が低い傾向にあります。</li> <li>• 隠岐圏域の再生利用率が低い要因として、島外のリサイクル業者への輸送費用が嵩むことより資源化対象物が限られていることがあげられます。</li> </ul>
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ごみ排出量の増加と再生利用量の減少により、平成23年度の26.2%をピークに再生利用率は年々低下しています。</li> <li>• 再生利用率の目標値を達成するためには、県民、NPO法人等、事業者、行政が一体となってさらに再生利用に関する取組を推進していく必要があります。</li> <li>• 資源ごみの排出量は年々減少しており、ペーパーレス化や容器包装の軽量化等が進みつつある社会状況からすると、今後、資源ごみが大きく増加することは難しいと考えられることから、可燃ごみや不燃ごみを削減し、資源ごみの分別徹底の啓発を行うことが、再生利用率向上につながると考えられます。</li> <li>• 取組の少ない可燃ごみ中の生ごみや草木等の有効利用について調査検討する必要があると考えられます。</li> <li>• 再生利用率の低い隠岐圏域では、住民・NPO法人等・事業者の協力により、積極的に再生利用の促進を図ることが必要です。また、隠岐圏域内でのリサイクルシステムの確立や、島外への輸送方法の改善などを検討する必要があります。</li> <li>• 再生利用量を増加させるためには、焼却残渣の有効利用や不燃ごみ等からの金属類の回収の向上が必要ですが、設備が必要なため、今後、施設更新時期に合わせた処理方式の検討を行うことが必要と考えられます。</li> </ul>